堀口大學全集

3

堀口大學全集

3

堀口大學全集　3

昭和五十七年四月二十日印刷
昭和五十七年四月三十日發行

著　者　堀口大學
發行者　長谷川郁夫
發行所　小澤書店
東京都千代田區富士見二―五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）
印刷　精興社
製本　大口製本
製函　日東工業
定價八五〇〇圓

© M. Horiguchi, 1982　　Printed in Japan

凡例

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論、隨想、飜譯作品（小說・戲曲・評論・隨想）等の各分野に亙って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

＊

一、本卷（第3卷）は、譯詩Ⅱとして、原作者別の個人詩集の形で堀口大學が飜譯刊行した書目のうち、新字新假名遣による刊本のあるものを採錄し、これに未刊の譯稿と舊稿とを補って、原作者ごとの譯詩集としてまとめたものである。

一、本卷本文の內容は、『ヴェルレーヌ詩集』、『ランボー詩集』、『グールモン詩集』、『アポリネール詩集』、『シュペルヴィエル詩集』、『コクトー詩集』、『イヴァン・ゴル詩集』、『クレール・ゴル詩集』、『デスノス詩集』の九點である。これ以外の個人詩集は第4卷に收めることにする。

一、本卷本文は、すべて著者生前の最新稿を底本とした（本卷・解題の「資料1」參照）。各詩集の最新の刊本が刊行された後に雜誌等に新らたに發表された作品がある場合にはその作品も採錄し、それぞれ適切な箇所に挿入した。

一、本卷本文には本全集第2卷・譯詩Ⅰの各詞華集に收錄されている作品も新譯されている限り重複を厭わず採錄した。但し、重複した作品は第2卷との關聯を明瞭にするために、本卷では作品の表題下にその詞華集の略號と所收頁のノンブルを示した。その略號は左記の通りである。

〔失〕＝『失はれた寶玉』（大正九年、籾山書店刊）。
〔月〕＝『月下の一群』（大正十四年、第一書房刊）。
〔空〕＝『空しき花束』（大正十五年、第一書房刊）。
〔新〕＝『新編月下の一群』（昭和三年、第一書房刊）。
〔青〕＝『青白赤』（昭和五年、第一書房刊）。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

〔キ〕=『キユピドの箙』（昭和五年、太白社刊）。
〔檳〕=『檳榔樹』（昭和十八年、青磁社刊）。
〔フ〕=『フランス詩集』（昭和二十五年、創藝社刊）。
〔海〕=『海軟風』（昭和二十九年、新潮社刊）。

一、各詩集の作品の配列は原則として各刊本における堀口大學の編集を尊重して決定したが、刊本相互間の收錄作品の異同や雜誌發表の新稿挿入等によって配列の順序が不明瞭になった場合は、編輯委員が原典にあたって配列を決定した。

〔例〕『アポリネール詩集』中の「雜集」、及び『コクトー詩集』中の「ポエジー」、「用語集」、「オペラ」。

一、本卷本文の行の右側に付した＊（＊1、＊2…）の記號は著者自身が付した譯註あるいは註解を示すが、これは刊本によって扱いがまちまちなので一括整理し、「譯註・註解」として本文全體の末尾にまとめた（一部の既刊の單行詩集に付されている「鑑賞ノート」もこの中に含まれる）。但し譯者が「原註」と明記している場合には、これを本文の一部と見做し、本文中の各作品の末尾に置いた。

一、各單行詩集に付されている序跋文は、本卷の解題に資料として揭出した。「解說」や「小傳」が併錄されている場合はここには採錄せず、第5卷の「評論」篇で扱う。

一、本卷本文の用字や假名遣等は、新字新假名遣を基準とし、原則として底本通りとしたが、次のような場合は訂正した（但し「舊稿拾遺」の部分だけは正字舊假名遣による）。

1　誤字・誤植と判斷されたもの。

〔例〕喜戯→嬉戯、個有→固有、タンホーザー→タンホイザー、大花潛（おおはなもり）→大花潜（おおはなぐり）等。

2　假名遣・ルビの誤り。

〔例〕いまは→いまわ、少しづつ→少しずつ、いづれ→いずれ、胸乳→胸乳（むなち）、等。

3　脱字、及び送り假名不足で不自然なもの。

〔例〕動(か)す、捨(て)る、横(た)える、泣(き)ごと、等。

4　著者の訛用と判斷されたもの。

〔例〕軒ぞえ→軒ぞい、しまえます→しまいます、まぐれこむ→まぎれこむ、等。

5　前後が轉倒したもの。

〔例〕起想→想起、龍土→土龍、等。

6　不自然な片假名表記。

〔例〕百ペン→百ぺん、ズウ體→ずう體、等。

7　拗音を使用しない外來語表記。

〔例〕ベスビアス→ヴェスヴィアス、ベニス→ヴェニス、オリーブ→オリーヴ、クローバー→クローヴァー、面紗(ベール)→面紗(ヴェール)、等。

8　俗字、及び簡略字。

〔例〕隙→隙、昂→昂、縄→繩、濶→闊、欝→鬱、噛→嚙、溢→溢、凉→涼、等。

9　會話に使用された《》『』。

〔例〕《》→〈〉、『』→「」。

一、次のような場合は底本通りとした。

1　著者獨自の用法。

〔例〕凋(しお)れる、対手(あいて)、酔い痴(し)れる、音なしい、膝まずく、一人ぼっち、案山子(かがし)、等。

2　同字、及び同語の異書體。

〔例〕沙＝砂、芦＝葦、親切＝深切、云う＝言う、何処＝何所＝どこ、一人＝獨り＝ひとり、等。

3　踊り字。

一、底本に付されているルビはすべて採用する方針をとったが、表題に付されている場合は特別なもの以外は削除し、本文中に同句のある場合はそこで補った。また、ルビの付されていない特殊な熟語にはルビを補った。

〔例〕秋波→秋波（たがしめ）、天鵞絨→天鵞絨（びろうど）、鰭→鰭（ひれ）、燕麦→燕麦（からすむぎ）、香油→香油（においあぶら）、手筥→手筥（てばこ）、等。

一、底本で著者以外の校閲者の手によって送り假名等が改稿されていると判断された箇所は、他本と校合した上で訂正し、出來る限り著者慣用の用法に戻す處置をとった。

〔例〕角川書店版『コクトー詩集』收錄の作品、等。

一、底本を訂正出來ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には、本卷に採錄された九人の詩人のすべての單行譯詩集の書誌的な詳細を記し、改版等についても記述した。また收錄作品の轉移も表にして示し、本卷收錄に至るまでの過程を明らかにした。

譯詩Ⅱ

ヴェルレーヌ詩集　5
ランボー詩集　121
グールモン詩集　189
アポリネール詩集　247
シュペルヴィエル詩集　403
コクトー詩集　467
イヴァン・ゴル詩集　607

クレール・ゴル詩集 663
デスノス詩集 683
譯註・註解 729
作品細目 765
校異・校註 795
解題 805

堀口大學全集 3

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

譯詩 II

ヴェルレーヌ詩集

土星の子の歌（一八六六年）

ウーゼェヌ・カリエールに[*1]

序詩

名に恥じぬ古い時代の《聖人》たちは
信じておった（当るも八卦）、
天空に吉凶禍福読みとりうると、
星の運勢身に受けて人は各自に生れてくると。
（夜空にさぐる星占の神秘の説も、幾度か、
深い心は解し得ぬ浅墓びとには嘲笑れた）
さるほどに神降し占者たちの飯の種
凶つ土星の気を受けて生れた者の一生は
不幸苦労のどちらにも事は欠かぬと
何やらの古文書に見えているとか。

病的な《空想力》が働きすぎて
《理性》の努力も無駄とやら
此奴らの血液たるや、毒薬ほどに利がよく
溶岩ほども燃えていて、乏しいままに沸き立ち流れ
悲願の《理想》焼き亡ぼすと。
《土星の子ら》は不幸、生きるも死ぬも不幸
（不死の奴[*2]なら別格だとさ）
生涯の構図の線をことごとく
悪い《感化》が引くからだとさ。

かえらぬ昔[*]

〔フ〕580

思い出よ、思い出よ、僕にどうさせようとお言いなのか？
その日、秋は、冴えない空に鵜を舞わせ
北風鳴り渡る黄葉の森に
大陽は単調な光を投げていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com